
リリカルヒカルツルギ

スーパー紳士

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

リリカルヒカルツルギ

【Nコード】

N3507Y

【作者名】

スーパー紳士

【あらすじ】

海鳴市に住む一人の少年、御堂光^{ミドウ ヒカル}はある日、不思議な宝石と出会う。

彼女が言うにはこの世界に危機が迫っているらしい。

正義を重んじる光は世界を救うために宝石の口車に乗せられてしまい、魔導師となる決心をする。

——その宝石、ティティが憎悪を秘めているとも知らず。

第1話：『剣』（前書き）

リリブリとは違ったシリアス（？）が書きたくて挑戦。
一味違ったなのは世界の再構成です。どうぞよろしければご覧にな
って下さい。

第1話..『剣』

最後に見たのは闇でした。

首を刎ねられた父の死体。

四肢を潰された母の死体。

胸を抉られた兄の死体。

全身を貫かれた弟の死体。

——私の死体はありませんでした。

闇に飲まれ、死体という形すら残らなかったからです。

家族の死体、そして自分を包む闇を睨に焼付け私の生は終わりを迎えます。

□side out

通称、古代ベルカと冠される時代。

現代において英雄達の武勇伝が数多く記される時代だ。

しかしその時代を生きる人々を詳しく記録した文献は少ない。

どうしてもそれは英雄や王達の武勇に霞んでしまうのだろう。

ツルギ
“剣の一族”

剣の扱いに長け、多くの戦場で武勲を挙げた一族、と記録には残さ

れている。

だがその一族、ツルギハイム家の詳細はやはり残っていない、否、記されてもいない。

記録の最後には、この一族は唐突にベルカの歴史からその名を消す、とあった。

群雄割拠。

現れては消えた英雄達の一部族だろう、と後年の学者達と言う。

それは概ね正しい。

補足するのであれば、ツルギハイム家とはあるデバイスによって一族血統一切合切を皆殺しにされたのだ。

そして記録の一部にはこのような記述があった。

“最後の当主は女子にて兵士戦場もろとも切り裂く剣の姫君——その名をティティマリアン・ツルギハイム”

□

どこか。

そこは暗いどこかだ。

闇の中、一人の男性の声が響き渡る。

そしてそれに応える声も一つ。

「貴公にチャンスをやろう」

——チャンス？

「何。別段貴公である必要は無かったのだが、運良く……悪くもか

？ 私の元に貴公が転がり込んできたのだよ。
魂という抽象的存在の召喚とはいささか私も不安ではあったが成功したようで何よりだ」

——貴方は何を

「おお、すまない。何分私も初めての経験でな。気分が高潮してしまったようだ。

……さて。姫よ、この様な形ではあるが蘇生を果たした貴公は何を望む？」

——そう、私は生き返ったのですね

「生き返った、か……果たしてそのなりで生きているとも言えるのかどうか……確かに蘇生、とは言ったがね。

まあいいさ。貴公の個は確かにここにある。死に行き消えるも、生き戻り具現するも貴公の自由だ」

——貴方は何を望んでいるのですか？

「全てだよ」

——なあにそれ

「すまないね？ 私の元となった遺伝子がそのような存在であったのだ。強欲にして無欲な無限の欲望さ。

……ふむ、そうさな。強いて言うなら貴公のこれから、行く先を見たい」

——貴方、今にも死にそうですけど

「ははは。そうとも、私の寿命は間もなく尽きる。だから、だからこそ最後に貴公の行く末を焼き付けたい！」

——酔狂な人ですね。でもありがとう、私にこの世に留まることを許してくれて。“復讐”のチャンスをくれて

「復讐か……ふむ、やはり人とは在り方が変わろうと闘争を望むか」

——違うわ。私が望むのは復讐だけ、怨敵の絶滅。そこに闘争というジャレ合いなんて望んでなんかない

「復讐は一方通行というわけか。……ククク！ では聞かせておくれ剣の姫君。貴公はこの無限の欲望に何を見せてくれる？」

『——闇の書の死に様を——』

それが彼女達の終わりと始まり。

闇に飲まれ消え行く魂が剣^{ツルギ}となって再びこの世に正を受けた瞬間と同時、

これを祝う無限の欲望は笑みを浮かべたままその生を終えた。

時はこれより数千年後へ。

ベルカが終わりを告げ、管理局が新暦と定めた新しい時代。

少女と少年が過去と未来を紡ぎ現在を生きる物語へと繋がる。

□光の剣 第一話 『少年』

新暦67年。

地球という星、日本という国、海鳴市という町に一人の少年がいた。彼は12歳にして達観した思考を持つ。

それは彼の年齢ではよくある成長期故の自己確立の一環とも思えるが、彼のソレは一つ違うところがある。

『正義こそ全て』

憧れであつた警察官の父の殉職。

憎悪していた母の失踪。

この二つの善悪が彼の在り方を決めた。

正義の味方であつた父と悪意の塊であつた母。

相反する在り方を家族という身近な視点で見てきた少年は若くして

呪いにも似た思考論を持つようになった。

そしてそれは父の死と母の失踪を切っ掛けに表面立つ。

ミドウヒカル
御堂光

彼は整った日本人らしい外見とは裏腹に人間味の欠けた精神を持つてしまったのだ。

しかし幸いにもそれはこの日本で生きる上で支障をきたす事はなかった。

呪いの発祥から2年。

彼は一応学生という普通とも言える身分を手にいれ、生を謳歌していた。

（聖祥小 6年生の教室）

「委員長、今日俺の家こない？」

放課後になり友人の一人が窓際で帰り支度を始めていた光へと声をかける。

「ごめん。今日はパトロールの日なんだ」

申し訳なさそうに両手を顔の前で合わせ友人の誘いを断る。

「またかよー。警察にまかせとけばいいじゃんそんなのー」

文句を言う友人に再び謝りながら

「子供ならではのパトロールもあるんだって。また誘ってよ」

ふーん、じゃあねー、と友人達と別れ光は今日も海鳴の街を歩く。

彼は正義感溢れる少年へと成長した。

クラスの学級委員長を務めこのように日々、街を見まわる事が日課になっているのもその表れだ。

だが所詮は12歳の子供。出来る事は限られている。

だが、彼が先程言ったように子供ならではのやり方もあったのだ。

「ポイ捨ては駄目だよお兄さん」

「ん、おお。済まねえな坊主。オジチャン気を付けるよ」

未だ幼さを残す男子に注意されるのは素直に心に響く者があるのだろう。

これが成人男性等であつたら一悶着でもありそうだ。

大柄の男性は道端に捨てた缶を拾うとゴミ箱へ改めて捨てる。

「お婆さん、お手伝いしますよ」

「あら、ありがとね光君」

横断歩道をその身に不釣り合いな荷物と渡ろうとしていた老婆の手助けをする。

このような事が度々あるので既に光はこの界限では有名人だった。

このように御堂光は己の目指す正義の味方へ向け着実な歩みを進めている。

その甲斐もあってかこの近所は平和そのものであった。

目の前で子供が善行を行っているのだ。大人達も自分の行動を見つめ直す事ができた。

ゆくゆくは警察官だね、とは周りの評価。

光自身も将来は父と同じ警察官になろうと考えている。

そのための日々精進。文武両道を心がける好少年であった。

・
・
・

住宅街の一角。

周囲と同じような規模を持つ少し大きめの一軒家。ここが御堂家、光の自宅だ。

ポストに挟まっていた回覧板を抜き取り次の回覧先、八神邸のポストへと差し込むと改めて帰宅する光。

「……ただいま」

少年の声に答える者はいない。

父は他界。母は家を出ている。

最初は身の回りの世話を申し出た親戚がいたのだが、警視であった父の遺産目当てであった事は幼い光でも分かった。

正義と悪。両極端な分け方の価値観を持つ光はそんな親戚を後者と判断。好意に隠された悪意を拒絶し、1人暮らしを続けたのだ。

幸いにも遺産はある。個人の生活能力も一応は高い。細かい法的な手続きは信頼できる遠方の親戚にお願いした。

寂しい我が家。

かつては父と語りあい、遊んだ暖かい家だった。

家庭を省みない母はさておき、光はこの家が大好きだった。

だが今は1人だけ。

慣れたとはいえやはり寂しさは拭えない。

ただ幸いにも彼には友人がいた。

親友とまでは言えなくとも普通に接し、遊べる友人達ができた。

それに近所の人達の暖かい援助もあった。

彼がこの年で孤独な生活を送っていても真っ直ぐな少年になれたのはそのお陰でもある。

「ふう…」

19時きっかりに夕食をとり、食後の休憩を挟むと日課のマラソンの準備を始める。

『健全な精神は健全な肉体に宿る』

ユウエナリスが提唱した言葉であるが、これは意識であり本来の意味とは少し違う、と近年見直された物。

だが光はこの言葉が好きだった。
何故なら父もこの言葉が好きだったから。

有言実行。

健全な肉体を保つために今日も光は日課をこなしに行く。

□

『ミツケタ』

それは突然だった。

明日は休日だし今日は少し遠出でもしてみようかな、と思い立ち定めた道順より離れた場所を走っていた時だ。

時刻は21時になる。

既に人々の喧騒は消え、闇を星と月の光があるだけの道。
少し前方には森林公園がある。

ふと、ナニカの声が公園の方から聞こえたのだ。

「？」

まさか事件？

光は少年らしくもありらしくもない発想を抱き公園へと入る。
しかし彼を待っていたのは事件ではなく、彼にとって後に一生の大事件となる引き金であったのだ。

公園の奥。

何かに引かれるように茂みを掻き分け、光が見つけたのは一つの宝石だった。

「青い石……？」

青く光る球体の小粒な宝石。

ビー球位のソレを光は拾うと手の中に収めまじまじと見つめる。

うん、高そうだ。

幼いながらも価値観は既に大人びている。
その石から受けた第一印象はそれだった。

「交番に届けないと」

持ち主が困ってるだろうな、と光は急ぎ知り合いの警官が務める交番へと足を運ぼうとしたその時だった。

『貴方が私のマスターですか』

「えっ……」

突然聞こえた声。

それは先程脳裏をよぎった声と同じ、女性の声だった。

夜も遅く、光の届かない公園というシチュエーションも伴って光は身震いしてしまう。

いくら大人びていると言ってもやはり子供なのだ。

『ふふ。私はココですよマスター。手をそっと開いてみなさい』

「……」

脳裏をよぎるのと同時に手の中からも声が響く。
まさか、と光は宝石を握っている手を開く。
するとそこには

『改めてはじめまして。お会いできて嬉しいですマスター』

点滅しながら女性の声を発する宝石。

「うっ……わ！」

あまりの驚愕に宝石を落とし腰も抜けてしまいその場にへたり込む
光に宝石は点滅しながら言葉を投げる。

『あいたっ。もう……レディに対するアクションじゃありませんよ
？』

あいた、て……
レディ、て……

既に色々突っ込みたくなった光だが彼も男の子。
恐怖よりも興味の方が勝ってしまったのかズリズリとしゃがみなが
ら宝石へと近づく。

『魔法資質のある人間が通りかかったので声をかけてみれば……こ
んな子供だとは思いませんでした』

「むっ」

何やら失礼な事を言われた気がした光。

『失礼。子供ながらにその魔法資質、驚かされました。褒めたのですよ?』

どうやら褒められているらしい。

宝石に褒められる僕って……ていうか魔法?

聞き捨てならない単語に引っ掛かりを覚えた光は改めて宝石と会話を始める事に決めた。

「え、えと……僕は御堂光。聖祥小学校に通う6年生、12歳。貴女の名前は何ですか?」

光の礼儀正しい反応に宝石は少し驚いた点滅、様子を見せる。

初対面の人には自己紹介を。

宝石相手にも欠かさず行う光はやはり優等生だった。

『順応性が高いんですね。失礼しました、私はティティマリアンと申します。親しい者はティティと呼びますのでマスターも是非そのように』

そんな光にこちらも礼儀正しく返す宝石、ティティ。

呆気に取りられたような光だったがまたも気になる単語につっこむ。

「よ、よろしくティティ。それでさ、さっきから言ってるけどマスターって何? 魔法って?」

『……頭の回転も速い。魔法文明の無い世界だと思っていましたがこれは当たりですね……』

ボソボソと独り言を言うティティに首をかしげる光。
ああすいません、とティティは答えた。

光は公園のベンチへと腰を降ろし、膝の上に置いたティティから話を聞く事にする。

『ではご説明します。私がここにいる理由、加えて魔法という外の世界の理を……』

・
・
・

12歳の少年にとってそれは御伽話のようだった。

ティティ曰く、この地球以外にも多くの世界が存在する。

しかも外の世界では魔法と言うファンタジーな文明技術が存在すると言うのだ。

疑おうとした光だったが眼前のティティを見た瞬間にその疑いは消える。

確かに信じないわけにはいかないのだろう。

だがしばらくは興味を持って話を聞いていた光であったがティティがここにいる理由を聞いた瞬間から目が見開いて行く。

「闇の書？」

『ええ。先程申したロストログアに属する物です。無限の転生を行い、転生先の世界を滅ぼす凶悪なデバイス、それが闇の書です』

そ、そんな……。

魔法と言う突拍子もない話だけでも頭がパンクしそうだったのに世界の崩壊、等と言う物騒極まりない話が飛び出たのだ。光は血の気が引くのを感じた。

『私には闇の書の転生を追跡するプログラムが組み込まれています。それによると今回闇の書はこの地球を転生先に選んだようです。そこで私は闇の書を止めるためにこの世界に来て、私を駆る術者、魔導師を探していたのです』

なるほど。

それで魔法資質とやらがある僕が選ばれたのか、と光は頷く。

『はい。ゆえに貴方、ヒカルをマスターと呼ばせて頂きました。この世界を救うため、どうかご協力お願いできないでしょうか？』

そんな事は大人に任せておけばいい。

普通ならそう考えるだろう。聞けば魔導師の戦いというものには非殺傷という設定があるらしいがそれは公式での話。

この事件で言えば血を見る事にもなるだろう、との事。

だが生憎、御堂光という少年は正義を重んじる。

自分にも事件の解決を導ける可能性があると言うのなら他人任せにするわけにはいかない。

それこそここでティティを見捨てるような人間が正義の味方になんかなれるわけがない。

そのような思惑は一瞬。

光は元気よく、まっすぐに頷き答えた。

「うん。協力するよティティ。僕達で世界を救おう」

『……貴方の様なマスターに巡り合う事が出来て良かった。ヒカル、どうぞよろしくお願いします』

こうして一人の光と一つの剣の運命は交わった。

少年はこれが正義の味方への第一歩と信じて歩き出す。

世界と人々を救う、これで父のような存在になれる。

御堂光は今日この時、理想の実現の手段を得られた事を神に感謝した。

だが彼は気付けなかった。

闇の書の転生を追跡する機能を持つデバイス、ティティ。

なぜ彼女が管理局という、次元世界が誇る巨大な治安維持組織を頼る事をしなかったのか、という事に。

——彼女に顔があればそこには邪悪な笑みが浮かんでいた、という事に。

□

『（マスター）』

「うおわ」

とりあえず家に帰って詳しい話を、と公園から帰宅する途中だった二人。

少し浮かれ気味な光は突然脳内に響いたティティの声に驚いてしまったのだ。

『（これが念話です。頭の中で会話が出来ます）』

「（……こう、かな）』

『（上出来です）』

なんとも不思議な感覚だ。

電話での会話を頭の中でやっているような感覚だった。
それで？ と続けた光にティティは答える。

『（あちらにいる少女はマスターのお知り合いですか？）』

「……え？」

思わず声に出す。

ふと元来た道を見れば、公園の入り口でオロオロしている少女がいた。

見た目からして一年生位だろうか。

頭の両サイドで結った栗色の髪がピョコピョコ揺れている。見た目通り元気な女の子なのかもしれない。

「（いや、知らない子だよ。多分ウチの学校の生徒かもしれないけど）」

そう言って少女の方へと歩み寄ろうとする。

こんな時間に女の子一人で夜道を歩くのは危ないから、と至極全うな思考で光は動いたのだが

『（必要ありません）』

それをティティが止める。

どうしてさ、と光は聞き返したが、ほら、とティティが教えてくれた方向、少女が来たと思われる道の向こうから一人の男性が駆けてきた。

その男性に怒られているような様子を見るにどうやら少女の家族のようだ。

なるほど、確かに僕の出番はないな、と納得する光。

こうして光は再び帰路を歩きだす。

しかしポケットの中に収まったティティはこう考えていた。

『（マスター以外に私の声に反応した人間がいたとは……。あちらの少女も破格の魔力を保有しているようでしたね）』

それは光もまた破格の魔力とやらを保有している、という事に他ならない。

しかし詳しくは調べないと分からないが少女の方が光よりは魔力を保有してそうであった。

残念、と光にばれないようにティティはため息を漏らす。

二年後。

正反対の帰り途を歩く少年と少女は再び出会う事になる。
だがそれを今知る者は誰もいない。

第1話..『剣』（後書き）

復習を誓う人格移植型デバイス、ティティマリアンと正義を愛する光の魔法の物語です。

と、カッコ付けた物はいい物の、難しすぎて泣けてくる。そうだ、ダークソウルをやろう。

猫森と夜アノールで僕のカンストキャラと握手！
スタッフ

……アプデでレベル上限作るんじゃないよ！！

俺さまぁー！！！！

第2話..『光』

雀の声とカーテンの隙間から日光が顔を覗かせる。

よく聞けば、遠くからは新聞配達であろうと思える原動機付き自転車のエンジン音。

御堂光の朝は早い。

「うう……ん」

最近は見覚まし無しで起きる事ができるようになった。

これも規則正しい生活を送ろうと心掛けている少年の努力の賜物だろう。

ただ、早起きというにはいささか早すぎる時間にも思えるが。

「朝ごはんはんと弁当作らないと……」

フラフラとベッドから身を起こし、ハンガーに掛けられた聖小の制服に手を伸ばす。

既に六年間着て来た制服だ。所々ほつれがあるものの彼に馴染んでいる証拠なのだろう。

しかし袖に腕を通そうとした時にふと光は思い出す。

「……今日は日曜じゃん」

そうだ。今日は休みだ。この時ばかりは自然と起きてしまう自分の体が恨めしい。

しかし二度寝するほど眠くも無いし家事を済ませてしまおう、と制服をハンガーへと戻すと私服を取りだすために箆笥へと向かう。

すると

『お早うございますマスター』

「えっ」

背の低い箆笥の上に置かれた青い宝石、ティティが朝の挨拶をしてきた。

少し寝ぼけ気分な光は一瞬驚くもすぐに状況の判断を始め、昨夜の出来事を思い出した。

「あ、ああ……お早う、ティティ」

にこ、と微笑みながら挨拶を返す。

そうだった。

僕は昨日ティティと出会ったんだ。

そして世界に危機に関する事も聞いた。

思い出すと一気に気分が覚醒する。

あの後、帰宅し話を促す光にティティは今日は遅いので続きは明日に、と就寝を促し返した。

素直に従った光はベッドへと体を投げる。普段はしない行為であったが疲れと驚きのせいもあってか彼はすぐに眠りについたのだった。

『お早い起床ですね。一人暮らしとは伺っていましたがまさかこれほど早いとは』

「まあ……家事とかあるし。学校がある日は昼のお弁当も作らないといけないからね」

テキパキと着替えを済ませ、ティティを優しく掴むと二階の私室から一階のリビングへと降りる。

朝食とお茶を用意しながら

「（ティティってお茶飲むのかな？）」

と何げなく考えていると

『お気づかいなく。そもそも私には口がありませんので』

「……りょかい」

心を読んだかのように返答が来た。

まあ二人分の湯飲みを用意しているのが見えたのだろう。

テーブルに置かれたティティはクスクスと笑っていた。

・
・
・

『ではまず改めて自己紹介を。』

私は人格移植型アームドデバイス、ティティマリアンと申します』

「ご丁寧にどうも。御堂光です。」

……デバイスって確か魔法使いの杖だっけ？」

朝食を済ませ食器を片づけた光はお茶を啜りながらティティに問う。

『魔法使い、とは言いませんね。ミッドチルダでは魔導師と呼んでいます。』

そしてデバイスとは杖、というよりも魔導師にあつた形態を取る武装のようなものです。一概に杖の形を取るとは言えません』

純粋な魔法使いもいるし、杖の形を取るデバイスもありますが、と補足する。

「それでティティは闇の書を追って地球に来たんだよね。協力するのは構わないけど僕に出来る事って何があるの？」

彼は驕らない。

文武両道と評価されてはいるものの、せいぜい中学生並の体力と知識しかない。

小学六年生でそれなら大したものだがこの場合、世界を対象にする と少々どころか大きく物足りない気分だ。

『ご心配なきよう。マスターには魔導師としての訓練を受けて貰います』

「僕が……魔導師に？」

興味と不安のブレンド。半々と言ったところだ。

『それもまたご心配ありません。私が手取り足とりご教授さしあげます。』

そうですね……一、二年あればマスターならそれなりの実力になると思います』

「結構長いね……」

『普通なら10年以上の訓練が必要なのですよ？ それを一、二年で済ますであろうマスターは天才なのです。自信を持って下さい』

褒められれば悪い気はしない。

しかも魔導師、という未知のファンタジーな要素で、だ。

12歳の少年には刺激がいささか強すぎた。

「分かった！ まずは何をすればいい？」

テーブルに身を乗り出す光に苦笑（？）しながらティティは答える。

『……そうですね。ではまず騎士甲冑のデザインからお願いします』

「きしかっちゅう？」

なんとなく言葉から西洋の騎士が着る甲冑を思い出す。

魔法使い……魔導師とはちょっと離れた感じだなぁ、と内心想う。

『バリアジャケットとも言いますが、術者を守る防護服のような物です。』

私がデザインしてもよいのですが、やはりマスターの意向に沿う物がよろしいのではないかと』

律儀な人（？）だな、と光はティティに好感を持つ。

その後二人は図鑑や雑誌を見ながら騎士甲冑のデザインを始めるのであった。

・ ・ ・

『set up、とマスター』

「せ、セツトアップ」

『get set』

御堂邸のリビングに濃い青の光が溢れる。
魔導師個人によって違う色を持つ魔力光。
光自身の色は濃い青色だった。

魔力が晴れるとそこには白いワイシャツに青いズボン。シャツの上
には黒いタンクトップのような防護ジャケットを羽織った光がいた。
それは地球、日本の警察官の恰好である。帽子は色々マズイよな、
と残念ながら無し。

『お似合いです』

「そ、そう？」

自分の正装、戦闘装束を父の姿を元に自分なりにアレンジした騎士
甲冑だ。

見ようによつては警官のコスプレでしかないが……。

とりあえず褒めて貰えたので光は満足だ。

『甲冑構築、マスター認証確認。改めて宜しく願いますマスタ

』

「うん、こちらこそ」

何度目かになる挨拶を交わすと早速、とティティは続けた。

『次に武装。先程申し上げた杖等の術者に応じた形態についてなのでが……』

なぜか歯切れが悪くなるティティ。

「どうしたの？」

『申し上げ難いのですが、私は一つの形態しか取れないのです』

「へー。何になるの？」

気にする様子も無く、首から下げたティティ、青い宝石に語りかける。

持ち運び用に、と工作キットで首から下げられるように紐を付けたのだ。

『剣です』

「剣？」

『詳しく言えばツーハンドットソードと言われる部類の剣ですね。マスターには少々……大きすぎるかもしれません』

「そ、そうなのか。とりあえずなってみてよ」

『はい』

そう言うとき宝石が光り、一瞬でその形態を変えるティティ。

閃光に目がくらみ、手で顔を抑えた光が次に見た物は床に深く刺さった巨大な剣だった。

その刀身は青白く光る銀色の厚く、長い。

鐔の先端には三つ葉を模した飾り。中央にはティティその物の青い宝石が埋め込まれている。

その圧倒的な存在感にしばし絶句する光であったが、その切っ先を見て吠えた。

「お、おま！？ 刺さってる！ ガッツリ刺さってる！！」

『おっと』

そうは言うが形態を変えようとしないうティティ。

アワアワとふためく光にティティは告げる。

『では抜いてみましょう』

「ぬ、ぬく？」

これを？

僕と同じくらいの大きさのこの剣を？

ちなみに光の身長は150センチ程。12歳にしては普通だろう。

そして目の前のティティもとい大剣。これもまた、床に埋まっている切っ先を含めれば150センチ程だろう。

嫌な汗が噴き出る光にティティは笑いながら答えた。

『マスター権限もありますし重力軽減の魔法もかかっていますから見た目ほど重くはありませんよ。』

『というかレディに向かって重い、とは何事ですか？』

「僕は言っていないし、自分で言ったんじゃないか……」

光はしぶしぶ恐る恐る、自分の肩口辺りにある柄を掴むと一気に引きぬく。

そう、一気に。

ティティは光が驚くほど軽く、呆気なく抜き取る事が出来た。

とは言う物の、重い物は重い。

修学旅行で行った京都で見つけた木刀位の重さだった。

だがそれを言うのと怒りそうなので黙っておく事にする紳士、光。

そして試しに軽く振ってみると少々重いものの、自在とまでは言えないが扱う事が出来た。

「でも僕、剣術なんて習った事ないよ」

それが彼の心配事だった。

確かにティティは立派な大剣となった。しかし担い手の自分はティティを扱えるほど武道に長けている訳でもない。

所属しているサッカーチームの監督兼武道家の高町さんだったら話は違うのにな、と思う。

『ご心配なく。私の中に記録されている剣術をそのままマスターにインストールしますので』

「インストール？ 人体に影響が出そうな響きで嫌だねなんか」

眉を顰め握る剣に苦言を呈す。

『悪影響はありませんよ？ 言うなればお勉強と一緒にです。電気信号として私の経験をマスターに上書きするだけです』

「ふーん」

とは言う物のやはり不安だ。

しかし光はティティの言葉に気になる点があったため、それを聞く事にした。

「ティティの経験？ ティティって剣を振ってたの？ ていうか人間だったの？」

『聡いですね……』

まずったなあ、とティティがぼやく。

言いたくなければいいよ、と光は言うがこの際ですので、とティティは自身の素性を明かす事にした。

『ご察しの通り。私は生前、人間として生きていました。しかし私は家族もろとも闇の書に殺されたのです』

呼吸が止まる。

ティティは何と言った？

” 殺された”

それは人間の犯す大罪。

それを経験した、とティティは言ったのだ。

12歳の少年にはこの事実を受け止めるには精神的余裕が無かった。しばし絶句し蒼白になっていく光にティティはお気になさらず、今はこうして生きていますから、と続ける。

『私が闇の書に固執するのもそのためです。私の様な存在を再び出さないよう、こうしてマスターと巡り合ったのです』

「そ……そうだったんだ……」

いまだ感情は復帰しない。

下を俯き納得したような素振りを見せる光にティティはどこかため息を吐いた。

『……マスター。世界には色々な物が溢れています。幸せも不幸も。生と死も。』

魔導師となり世界を救う、と仰られるのであればこの先、生死を目の当たりにする事もあるでしょう』

「うん……」

『強くありません。正義の味方になりたいのでしょうか？』

12歳の少年にそれを言うのは酷だろう。

ティティは分かっているながらも己の願望を果たすため、少年へと発破をかけた。

光自身もまた目指すべき理想のため、ここでへこたれるわけにはい

かない、と無理やり自分を奮い立たせた。
それを見て、それでいいのです、とティティは笑った。

『続けます。私は死後、魂とも言える人格をデバイスへと移植され
生き延びました。』

故に私には生前剣を振るった経験と記憶が記録されているのです』
これでも結構強かったんですから、とその場を空気を和ますように
補足する。

それを聞いた光もその気持ちを組み笑う。

「そっか。なら安心だ。でもティティ任せていうのも嫌だから僕は
僕なりに努力するよ」

『流石ですマスター』

こうして二人は最初の信頼関係を結ぶ事に成功したのであった。

□

『それでは魔法に関する訓練ですが』

「うんうん」

一転興味深々となった光に苦笑するティティ。

『まずはマルチタスクを会得しましょう』

「マルチタスク？ 複数思考？」

『マスターは本当に頭がよろしい。厳密に言えば情報分析・戦術立案・戦闘行為の並行処理ですね。これを会得すれば日常生活の中でもイメージトレーニングを同時にこなす、といった事も可能です』

上達すれば飛行しながらの戦闘も、と続ける。光は空を飛びながらバンバン魔法を撃つ自分を想像しニヤけてしまう。やれやれ、と頭があったら振っているだろうティティも主の意気込みを感じて満更でもなさそうだ。

□

こうしてこの日から光は魔導師としての第一歩を踏み出した。

日々の体力作りに加え、魔法の訓練を追加。

いち早くマルチタスクを会得した才能に驚きつつもティティも指導に身が入る。

朝起きて、その日の準備をしながらイメージトレーニング。学校では授業を受けながらイメージトレーニング。

帰ってきたらランニング。早目に切り上げ自宅の庭で剣を振る。

気づけば1年間という時間はあっという間に過ぎ去った。

ティティと出会ったのが六年生に進級したての五月。

そして今日この日はいよいよ聖小の卒業式となった。

卒業生代表として壇上で挨拶をする光。首から下げられたティティもそれを聞く。
なるほど、数千年経っても学園の卒業は変わりませんね、と思う彼女だった。

壇上から降り、席へと戻る光。

ふと見やれば二年生の席からだろうか。こちらを見つめる視線が合った。

卒業生代表に視線が集められるのは当然だが、それはその中でも一際強かったのだ。

だから光はその視線の先を見返すとそこには

「…」

一年前にティティと出会った公園で見かけた栗色の髪の少女がいたのだ。

あの後、所属するサッカーチームの高町監督の御誘いで彼の経営する喫茶店に寄った際に紹介された時に分かった事だが、彼女は高町監督の次女との事。

不思議な縁もあるもんだ、とその時は光は思ったのだがティティはどこか違う感情を抱いているようだった。

それはまるで、予備の部品を見つめるような機械的、それで何かの候補を警戒するような視線だった。

しかし実際に目がない彼女のソレに光が気づけるはずもなかった。

そして今。

件の少女、高町なのはの視線と光の視線は交わった。

お互い何を思っているのか。

もしかしたらなのは光の事を覚えているのかもしれない。
あの公園以降にもサッカーの応援に来ていたらしいしそりゃそうか、
と光は納得した。

こうしてつつがなく卒業式は幕を引き、晴れて光は聖中へと上がった。

□

中学校に上がってもやる事は変わらない。

中学校でも学級委員長になり、生徒会にも所属する。魔導師になってもその在り方は損なわない。

その態度が気に食わない、と喧嘩をふっかけてきた先輩もいたことにはいたが、悪と断定され光による容赦の無い粛清を受けて以来、彼らはナリを顰める事となった。

そして日課となった訓練に加え、これまた日課のパトロールも継続。いよいよ持って御堂光は海鳴の有名人へとなっていく。

とは言っても名物中学生、という肩書でしかなく、その事が光の向上心を更に刺激し魔導師として腕を上げて行く。

『闇の書の転生先は概ね把握できますが、詳しい場所と術者の特定は難しいです』

とはティティ。

闇の書の発動前に術者を止めればいいんじゃないか？ という光の問いへの答えだった。

事後の処理、というのは嫌だな。犠牲者がでるかもしれない、と光は思う。

だが、だからそのために訓練ですよ、と説得されまた訓練に身が入ったのも事実。

こうして、わずか一年と少しで光はティティ任せではなく、個人の能力だけで魔導師ランクAAと称される位まで上がる事になる。

いつかのどこかで管理局の一人がこう言った。

「地球出身の魔導師はいつもこいつもデタラメだ」と。

間違っていない。先天的に地球出身者はリンカーコアに膨大な魔力を保有する。

魔法文明が根付いていない分、発散する先が無いために個人個人が一生をかけて魔力を貯蔵しているのだ。

光はその中でも才能に恵まれ、持ち前の正義感とティティの指導により着実に実力を付けていった。

□

時は流れ中学一年の秋。そろそろ寒くなってきた秋の午後。マフラ―を巻いてポケットに手を入れ光は歩く。
いつも通り学校を終え、帰宅し自宅のポストを覗く光は回覧板を見つけた。

「……次は八神ちゃんか」

両隣の家は現在空き屋。故に少し離れた場所にある次の回覧先の家へと踵を返す。

少しばかり距離があるものの光にとってはどうという事はない。

部活には所属していないものの、その体力は既に学校随一となるまでになっていた。

いつも通り八神家のポストへと回覧板を入れ、帰宅しようとした光に背中から声かけられた。

「あれ、御堂さん？」

「やあこんばんは八神ちゃん。遅いね、今帰りかい？」

声の主である少女へ振り向きながら挨拶をする。

その視線の先にいる少女は立ってはいない。だからと言って寝ているわけでもない。

彼女は座っているのだ。車椅子という補助器具に。

「はい。図書館の帰りに夕食の買い出しに。今日は鶏肉が安かったんで沢山こうてもうて」

てへへ、と手置きに下げられた重そうな荷物を指さして少女、八神はやては笑う。

「え、本当？　どこのスーパー？　カクチ？」

自分のよく行く少し離れた大きなチェーン店スーパーではそんな情報が入手していない。

となれば身近にある小さなカクチスーパーだろう、と光は検討をつける。

「です。でも今日の分は売り切れてしまいましたよ？　残念でしたー」

関西弁のイントネーションを含むその口調を実は気に入っている光

はまじかよー、と嘆く。

くすくすとそんな光を見てはやても笑う。

お分かりだろうが、この二人は知り合いだ。最初の出会いとは図書館。回覧板をやり取りする程近所だと気付いたのはその時だ。

お互い家が近所という事もあるし、読書好き、自分で料理をする、等と結構な数の趣味が合う。

そして何より境遇が似ているのだ。

その切っ掛けは違う物の、二人とも両親がおらず、一人暮らし。お互い寂しさを紛らわすように自然と友人になった。

傷の舐め合いではあるがやはり気が楽になる事は事実。二人は仲が良い兄妹のような関係になっていた。

そして、はやては光と違い足が不自由なため、最近になって光は八神家で勉強を教えたり、料理を振る舞うようになっている。

「どうです？ 御堂さん、今日はウチで食べていきませんか？」

そんな関係だからはやてもスーパーの袋を指さし、気軽に光へと夕食の御誘いをかける。

だが光は申し訳なさそうにそれを断った。

「ごめんね。今日は用事があるから無理なんだ」

「そうですか……」

今日は帰宅してティティの扱いに新しい要素を取り入れる訓練を予定していた。

決めていた事を破棄する事を嫌う光であったが、目に見えて落ち込むはやてに慌ててしまう。

「あ、いや！ 明日は……無理だな。明後日は！ ……無理か……。
うーん……そうだ！ じゃあ今週の土曜は休みだからその日のお昼
からお邪魔してもいいかい？」

明日も特訓、明後日も特訓。

明々後日は第二土曜なので学校も休みだ。その提案にはやてはクス
クス笑いだす。

え、と一瞬呆ける光だったがすぐにこの子狸に一杯食わされた事に
気が付いた。

「あかんわあ。御堂さん、すぐに顔に出るから面白くて敵わんわ」

けらけらと楽しそうに笑うはやてに顔が赤くなるのを感じる光。

どうも苦手だ。友人としては楽しくて暖かいから好きだけど、女の
子としてはどうも苦手だ！

小学二年生の女の子にからかわれる男子中学生の図がそこにはあっ
た。

「む。じゃあいいさ。御堂家特性鶏鍋はお預けだな」

ぷい、と拗ねたように顔をそむける光。

最近の彼にしては珍しい子供っぽい仕草にいいよ笑いがとまらな
くなるはやて。

「あはははは！ ”海鳴の味方”の御堂さんも型無しや！ それに
土曜だと鶏肉駄目になってしまうで？」

「そんな事はないさ。冷凍すれば一カ月は持つぞ」

急に主婦らしい事を言いながら”海鳴の味方”というここ最近にな

って付いたあだ名をスルーする。

目指すは正義の、はては世界の味方だ。こんな小さな町で満足するわけにはいかない。

名誉ある称号ではあるが光はこのあだ名を少し嫌っていた。

「一か月……ちょお怖いなそれ。

まあええわ。じゃあ土曜のお昼に来てくださいね？ 待ってますよ」

そう言うはやてを後ろから押してあげながら見送り、光も家へと帰る。

歩を進めながら何を作ってあげようか、と光は考えていると

『マスター』

ティティが声をかけてきた。

珍しく念話ではなく肉声だ。

「なに？」

『八神はやてには用心を』

「なっ」

突然の警戒進言。

それもあんな少女に対して、だ。

だがティティが言うからには相応の理由があるのだろう。

「なんでだ？」

『彼女からはマスターと同じく、魔法資質を感じます。それこそ、

あの高町なのはに匹敵するレベルの物を』

「……嘘、だろ？」

最近になって分かった事だが高町なのはも自分と同じく魔法資質を持つらしい。

しかもそれは光を軽く凌駕する程の。更にそれは次元世界でも稀な強大な物らしい。

それに匹敵？

あのコロっとした小さい少女が？

最近、自分の知っている現実と日常が少しずつ崩壊していくような感覚を覚える光。

魔法という存在に出会った事により良くも悪くも変わりつつある生活。

その影響がまさかこんな所にまで現れるとは思わなかった。

『まあ警戒するだけで結構ですよ。……もしかしたら八神はやてが闇の書の主になるかもしれない、と』

「……」

考えたくも無い。

あの優しい少女が破滅を振りまく巨悪の権化になる？

やめてくれ、冗談にしても性質が悪い。

だけど

——そんな事はありません

本当にそうならどうする？

——友人だ。大切な友人だ。彼女は善側の人間だ。

決まってる。

——僕の在り方は正義の味方。悪ならば

僕は■す。

——八神颯を■す

『マスター？』

「え？」

ティティの言葉で現実に戻る。

何か嫌な事を考えていたようで、それを頭を振る事で忘れる光。
気が付けば自宅の前だったのようだ。

「……なんでもないさ」

ティティに心配をさせたようだ。

気丈に笑って答え、彼は家の扉を開いた。それは何かの覚悟を潜るような仕草のようだった。

『ふふ……そうですか』

感情が分からない笑みでそれにティティは答えるだけだった。

第2話..『光』（後書き）

タイピングが進む！

これが『新作を書き始める最初の快感』で『既作品を忘れる逃避の快感』ですね！

すいません。

リリブリもちゃんと書いてますよ？ アグスタ編と地球編とか。

カnst生身で猫森にいても結構侵入されますね。

迎撃するとソウル300万とか貰えますけど。

なんというインフレ。使い道が無いからアレですけど。

第3話..『夢』(前書き)

プロローグこれにて終わり。
次回より本編です。

第3話..『夢』

「父様ー！」

「おお、どうしたねティティ」

「みてみて！ 兄様に勝ったー！」

テラスでの妻との紅茶を楽しむ時間を中断し、駆け寄る愛しい娘に抱擁を与える。

そして娘が来た方向、兄と妹が遊び、もとい訓練をしていた場所を見ればそこには大の字になって目を回す長男の姿があった。

「なんと……次期当主ともあろう男児が情けない」

片手で頭を抑え俯く父に、片手で抱かれた娘は不思議そうな顔をする。

そんな娘を再び見、父は思う。

この子の剣の才は稀代のものだ。

兄はおろか私すらも越えるやもしれんな。

戦場にて。

魔法を使う数より剣を振る数のほうが多く、その強さも加わりベルカに名を馳せる事となったツルギハイム家。

現当主のこの男は多くの戦場、生死のやり取りが存在する修羅場を潜り抜けてきた。

そんな彼だからこそ、自分の娘に継がれる有り余る才能を見抜き、嬉しくも恐ろしく思う。

なるべくなら女らしく、とは思うが儂いものだな……。

こうしてティティマリアン・ツルギハイムはこの日より次期当主として厳しくも暖かい日々を過ごす事となる。

□第三話..『夢』

『……夢、か』

スリープモード中にこのような生前の記憶、記録が再生されるのは彼女が純粋なデバイスでないせいだろう。

時刻を確認すれば午前三時。主の光でさえいまだ夢の中だ。

『……家族、ね』

すでに1年以上もの間共に過ごしてきた目の前で眠る主、ヒカル。二人の間には、それなりに信頼関係のようなものが存在するが彼女にとってそれは重要ではない。

闇の書を追う事数千年。既に幾人かの魔導師をマスターとして食いつぶしてきた。

今回もそのうちの一つだ。

この地球という世界には魔法文明が無いと知ったときは流石に慌てたが、光の素質を見て安堵した。

しかもその素質はこれまでのマスターの中でもとびきり高い。

この一年、めきめきと実力を伸ばす新しいマスターにティティは満足していた。

『頑張りなさいヒカル。貴方の正義は私が認めるわ。
だからどうか、私の肉となり剣になる事を許してね?』

その告白は光に届いていない。

罪悪感など当に忘れた。いかに限界まで利用できるか、それがティ
ティの考えている事なのだ。

ふと、先ほど見ていた”夢”を思い出す。

そこには懐かしい家族の顔と暖かな日常があつたように思う。

『父様の名前……思い出せない……』

この長い復讐の時間の中、忘れてしまったのは罪悪感だけではない
のかもしれない。

□

「もう春だねティティ」

『そうですね。夕刻だというのに外気温の低さが気にならなくなっ
てきました』

光とその首にさげられたティティは二月の夕焼け空の下を歩く。
彼らは学校の帰りだった。

少し遅い帰宅になってしまった。夕食の材料を急いで買わなければ
ならない。

光は近所のスーパーへと足を運ぶ。

「光君？」

そんな時にかけられた言葉。

後ろを振り向いた光の視線の先には少年たちを引率し、サッカーボールを片手に持った男性が立っていた。

「高町さん。お久しぶりですね」

その男性の名前は高町士郎。

光が小学校の時に所属していたサッカーチームの監督であり知り合いだった。

「うん久しぶり。驚いた、大きくなったね。最後に会ったのは去年の卒業式だったか……元気だった？」

「ええ。変わらず運動も続けてます。おかげさまですこぶる元気ですよ」

「それは良かった。……今帰りかい？　少し遅めの帰りみたいだけど」

士郎達は試合の帰りなのだろう。

確かに腕時計を見れば、短針が六の字を少し過ぎた所だった。

「ええ。生徒会の会議がありました」

「ほう、生徒会か。いやいや立派だね。鉄さんも喜んでるよきつと」

御堂鉄。御堂光の父であり目標である人物の名前が挙がる。

士郎と鉄は知り合いだったらしく、光も士郎とは父の葬儀で会って

いたらしいのだが、傷心していた光は忘れていた。

その事を知ったのは気持ちの切り替えが終わり、サッカーチームに所属し士郎に声を掛けられた時だった。

「ありがとうございます。父もそう思ってくれていると良いのですけど」

「ははは。きっと大手を振って迎えてくれると思うよ」

「僕はまだピンピンしてますから!？」

軽口で和ませてくれる士郎。

光は士郎が好きだ。父と同じ正義の側の人間で、また違う強さをもっているように思えるから。

「ところで光君。買い物袋が無いところを見ると夕食はまだかな？」

聞けばこの後、士郎が経営している喫茶店で祝勝会と夕食を兼ねた催しが行われるらしい。

光はそのお誘いを受けたのだ。

「うーん。いいんですか？」

流石に無下にも出来ず、申し訳なさそうに尋ねる光。

「おいでおいで。チームの先輩だろう？ 彼らにも色々教えてやってくれ。」

それに君が来てくれれば恭也も喜ぶ」

高町恭也。士郎の長男で光の先輩だ。

通ずる物があるのか恭也と光は兄弟のように仲が良い。

恭兄さんと会うのも久しぶりだな、と光は考えた。

「じゃあ……お言葉に甘えさせて頂きます」

「よしよし！　じゃあ早速荷物を持ってもらうかな！」

「ちよっ」

そう言ってスポーツバッグを渡され苦笑する光の頭をガシガシと撫でる士郎。

そのゴツゴツした大きな手は父のようで光は嬉しかった。恥ずかしいので顔には出さないように勤めたが。

だが心の片隅で「まだまだ子供扱いか」と少し暗い感情を抱いてしまっているのであった。

□

「光！　大きくなったな！」

「恭兄さん、一年ぶりです。僕だって生き物ですからそりゃあ大きくなりますよ」

笑いながら握手を交わす少年と青年。

御堂光と高町恭也だ。

士郎とその妻の高町桃子が経営する喫茶店、翠屋のカウンターで二人は再会を喜んだ。

奥のテーブル席のいくつかは少年達が座りおのおの今日の試合を振り返り盛り上がっていた。

「今日はどうしたんだ？ 自分から翠屋に来るなんて珍しいな」

「いえ、生徒会の帰りで遅くなった所を士郎さんに捕まりまして」

二人が厨房を除くと、士郎がグツとサムズアップをしている姿が映った。

苦笑しながら、それは幸いだったな、と恭也が言う。ええ、幸いにも、と光も笑った。

そうして二人は近況の報告と久しぶりの再会に花を咲かせた。

・ ・ ・

「そうか。中学校でもいつも通りか」

コーヒーをブラックで飲む恭也。

それを真似て光も同じ物を頼んだが、ブラックの美味しさが分かるには少々早い。

くくく、と笑われた事で少し恥ずかしく思いながら光は答える。

「まあ概ね。小学校よりは出来ることも増えて遣り甲斐もあるし楽しいですよ」

「ははは。」海鳴の味方”は大変だな。俺も中学のときは色々無茶したっけか、懐かしいな」

遠くを眺める仕草で当時を思い出しているのだろう。

しかし微笑む恭也と違い、光はどこか不満げだ。

それは恭也の言った”海鳴の味方”という単語が原因だった。

あくまで正義の、はては世界の味方を目指す光にとってその言葉は自分の評価が未だこの町に留まる事を知らせる事実。

中学生なのだから当然といえば当然なのだが、魔法という超技術を身につけ、向上心が更に高まった光にとってそれは不満を感じさせる物だった。

そんな光を見て恭也は告げる。

「光、あまり無理はするなよ」

「え？」

肩に手を置かれた光は自分の心が読まれた事を悟り静かに聞く。

「人には出来ることと出来ないことがある。前者の範囲なら努力は実り、結果も望ましい物になるだろう。

だけど後者は違う。己に余る無謀は身を滅ぼす事になる」

ちら、と恭也は厨房にいる父を見る。

原因はそうとも言えないが、士郎も数年前に大怪我を負い、以前の仕事から身を引いていたのだ。

「それは……」

分かってはいるが納得はできない、と俯き思案顔になる光に恭也は

優しく笑いながら続けた。

「向上心を持つことは悪くないさ。俺はただ、体を大事にしろ、と言ってるんだ。

それに自分に出来る事があるなら無茶すればいい。無理でなく無茶、をな」

ガツシガシと方から頭に移動した恭也の手が光るを撫でる。

むっ、と少し顔を赤くした光は「わかりました」と呟き、士郎から渡された食事を食べ始めた。

そんな様子を苦笑しながら見守る恭也。

彼は知っているのだ。

光が持つ正義という、脅迫概念にも近い理想^{ノロイ}を。

だがそれは間違っているとも言えない。だから彼は弟にも思う光に忠告、激励を送ることしか出来なかった。

そしてそんな光景を見ていたティティはその夜、懐かしい夢を見ることとなるのだ。

□

「ご馳走様でした」

光は明日も早いので、と2次会（飲酒無し）の誘いを断る。

残念、また来てくれよ、と士郎と恭也の名残に頭を下げ翠屋を後にした。

既に時刻は20時。

今日のマラソンは無しか、と寝る時間の方を優先した光は夜空を見上げながら呟いた。

星を見上げる光の表情からはその心情がはかれない。ティティも何も言わず共に空を見る。

自宅までの数十分の道のりでは二人とも喋ることなくただ何かを思い、天を仰ぐだけだった。

自宅に着いた早々に光は次の日の準備を始め、寝る準備を整える。明日の弁当に使う食材の仕込みも住み、風呂から上がる。するとこれまで喋らなかったティティが声をかけた。

『マスター。貴方は正義を望んでいるのですね？』

「……」

無言は肯定。

そう捉えたティティは続ける。

『ならばあの男性の言った事はお気になさらないほうがよろしいかと。』

己を犠牲にしなければ救えぬ人や世界もあります。数千年を経験した私にはそれが言えます』

自信を持ちなさい。

マスターの滅私はずや世界を救います、とティティは言った。

「別に滅私なんて大層な事は考えてないよ。ただ僕が出来ることをやるだけさ」

そう言うときティティを机の上に置き、光はベッドへと入った。
しかし寝息は聞こえず少し乱れた呼吸から起きている事が分かる。

『私は貴方が正しいと信じています』

そう言い、二、三度点滅するとそれきりティティは黙る。

どうやら寝た(?)らしい。それを聞いた光は何を思うのか。

先日、闇の書の主の候補として警告された一人の少女の顔が脳裏に
浮かぶ。

「……そうさ。僕は正しくないといけないんだ」

最後にそう言って光も目を閉じ眠りにつく。

何かを覚悟したのか。先ほどよりは少しスッキリとした表情になっていた。

だから。

暗い部屋の中、光の見えない所でティティが薄く点滅したとに気が
付かなかった。

『——そうよ——私は正しい——』

それは主か自分へか。どちらに向け放たれた言葉だったか。

ひょっとすると誰へも向けず、零れただけだったのかもしれない。

舞台はこうして整った。

物語は始まる。

少女と少年、魔法と運命、ヒカルツルギが交差する。

第3話..『夢』（後書き）

余りのレスポンの無さに逆にテンションあがってきた。

こうなりや簡潔まで感想、おきに、評価0のままつつぱしってやんよ！

ひゃっほー1！！

前がかすんでなにもみえねえ

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3507y/>

リリカルヒカルツルギ

2011年11月12日07時20分発行